



シビルサポートネットワークニュース

NPO法人シビルサポートネットワーク

2017年7月31日

2017年夏季号

本号の内容

- 夏に語る
・シニア世代の「暇に励め」
- 事業報告
・CSN シンクタンク事業の紹介
- 活動報告
・第25回 CSN サロン「自分史を書こう」
- トピックス
・太田教授も逆流坂川を歩く
・明治150年企画事業
- CSN のうごき
- コラム
・エモい

□ 夏に語る □

シニア世代の「暇に励め」

代表理事 辻田 満



現役世代にとっては「暇」とはなかなか作ることの難しい「時間」であり、ただただ仕事や家事・育児に忙殺されて暇な時にやりたい

ことは夢のまた夢となっているのが現実ではないでしょうか。

そして、リタイア後は旅行、読書、散歩、趣味と何でも好きなことができる夢のような

世界が待っていると多くの現役世代の方々は想像しているのではないのでしょうか。

しかし、リタイア世代にとっての「暇」はそんなに甘いものではない現実をリタイアした時に知ることとなります。

リタイア世代にとっての「暇」とはこれまた過ごし方の難しい「時間」となるのです。

私が「暇に励め」という言葉に出会ったのは今から35年程前の30代半ばのまさに現役真只中の時期でした。

確か文芸評論家の古谷綱武氏が新聞のコラムに書いた記事を私の友人が仕事に忙殺されている私を見かねてご参考までにと紹介してくれたものです。

この「暇に励め」という言葉の意味は「多忙も自分が求めて作るものであろうが暇もまたあるものではなく自分で求めて作るもの。意志つよく暇をつくれ。そして、その暇を充実させて生き

ろ。」というものでした。

現役世代は「時間的ゆとり」、「生活のゆとり」、「経済的なゆとり」、「精神的なゆとり」など、なに一つとっても「ゆとり」などあろうはずがありません。

毎日、毎日、精一杯生きていると言った感じだけではないのでしょうか。これはいつの時代も普遍的なものではないかと思います。

リタイア世代の暇の励み方として「リタイアライフ 3分の1理論」をお勧めします。

「リタイアライフ 3分の1理論」とはリタイア後の生活時間の1/3は額の多少に拘わらず汗をかい収入のある仕事をまずすること。



次の 1/3 は社会に役立つボランティア活動をする事。

そして残りの 1/3 は自分の好きな趣味（レクリエーション）をして過ごすことです。

この各々の 1/3 のバランスをとって常に充実した前向き生き様を子供や孫たちに見せることができれば幸せだと思います。



「リタイアライフ 3 分の 1 理論」の中で特に困難なのは実は趣味（レクリエーション）をして過ごすことなのです。リタイアして時間が出来たので何か趣味をやろうとしても現役時代にやっていたゴルフぐらいしか思いつかないのではないのでしょうか。

ど素人が仮にテニスをやろうと思っても、油絵を描こうと思ってもそう簡単に楽しめる領域に達することは出来ません。趣味を楽しめる領域まで到達するにはかなりの時間を必要とします。



身の回りには多数の趣味のサークルがあります。しかし、そこに参加しているのは女性陣ばかりで男性の姿は極々少数です。

近隣の図書館のソファにはずらりとリタイア世代の男性陣が本を読むわけでもなく只々時間つぶしに居眠りをしています。

おそらく家の中に一日中いる事も出来ず、かといって出かける先もない男性達が集まっているのでしょう。現役時代にバリバリと働いて来た企業戦士の末路の姿に哀れさを感じざるを得ません。

シニア世代になった今こそ「暇に励め」が必要です。

古谷綱武氏のコラム記事とはニュアンスは大きく異なりますが「シニア世代になって暇がある今こそ、意志つよく暇を活かして生きる。

そして、その暇を充実させて生きる。」と言ったところではないのでしょうか。

まだ、都電が走っていたころの、暇のつぶし方

植草甚一「ワンダー植草・甚一ランド」より

わが道はすべて古本屋へ通ず

ぼくは、つぎのような場合に、古本屋を歩きたくなる癖がある。

- 一 寝不足の日の正午前後。
- 二 ひとりぼっちで酒を飲みだしたとき。五時半から六時にかけて。
- 三 三、四日つづいた雨あがりの日。
- 四 本を買った夢を思い出した瞬間。
- 五 そして古本を調子よく買っているとき、ますます歩きたくなる。十時ごろまで。

出発点はたいてい日比谷公園前である。小川町か神保町で電車を降りる。小川町で降りたときは、丸善支店へいくまでに古本屋が三軒あるので、ざっと覗き、まんなかの武内でなにか一冊買う。（中略）

（古本屋街を歩きまわると）十時間ぐらひはすぐたってしまう。そしてくたびれるとぼくは、三省堂の裏の「ラドリオ」

へ行行ってウイスキーを飲みながら、買った本をさすって独りでいい気持になることにしている。

□ 事業報告 □

シビルサポートネットワーク（CSN）

シンクタンク事業の紹介

近年、地方創生など、地域には独自の発想や行動力が求められる局面が増えています。

地域の諸問題に取り組むサードセクターとして、NPOに寄せられる期待は大きなものがあります。

その期待に応えるためには、ポタンラリーな活動では限界があり、事業として取り組むことで、地域社会での役割を果たすことが出来るのではないか、と考えます。

すでに、営利型企業としてのシンクタンク組織は数多く存在しておりますが、非営利型のシンクタンク組織は少なく、とくに建設分野に特化した

地域の諸問題に取り組む専門のシンクタンクはありません。

NPO法人シビルサポートネットワーク（CSN）は、建設分野出身の中立公正な専門技術者集団です。

創設以来、幾つかの社会的な課題をシンクタンク事業として取り組んで来ました。

今後とも、広く会員の皆様の人脈を通じて、業務実績を積み重ねて参りたいと願っております。

【政策提言】

- 平成16年度環境省政策提言提出
- 千葉県中央地域畜産環境改善構想の策定（農水省）
- 吉川新都心構想の提案
- 中川を活かしたまちづくり構想

【技術評価業務】

- 日本政策投資銀行からの技術評価業務委託
- 日本政策投資銀行からの特殊緑化市場調査業務委託

【研究会支援】

- 企業価値向上のための防災投資促進研究会
- BCPにおけるリスク研究会
- 共創プラットフォーム事業化研究会

【BCP策定支援】

- 中小企業向けBCPセミナーの開催
- 東埼玉テクノポリス協同組合BCP策定指導
- 熊谷流通センターBCP作成指導

- 埼玉県南卸売団地組合BCP作成指導
- エイジェックグループとBCP支援業務委託

【バイオマス活用推進】

- 太田市バイオマスタウン事業化計画策定業務
- 南魚沼市バイオマスタウン構想策定業務
- 南房総市資源循環地域構想書策定業務

また、取引先としては下記の企業との取引実績を有しております。

日本政策投資銀行、(株)安藤ハザマ、(株)奥村組、(株)熊谷組、西松建設、(株)武蔵工業大学総合研究所、(株)篠塚研究所、(株)長大、日本技術開発(株)、日本交通技術(株)、京王電鉄(株)、(株)オーム電機、(株)丸和運輸機関、東包印刷(株)マルシン(株)、第一三共ロジステック、トーゼン産業(株)、厚川産業(株)、(株)サイゼリヤ、東京日野自動車(株)、熊谷流通センター、(株)藤沢商事、(株)清水アーネット(株)、ムトーセーフ、埼玉県南卸売団地、埼玉薬品(株)、丸宮食品(株)、(株)鯉平、(株)サイボウ、(株)エイジェック、日本有機資源協会

□ 活動報告 □



東京創作出版 永島静香代表の講演

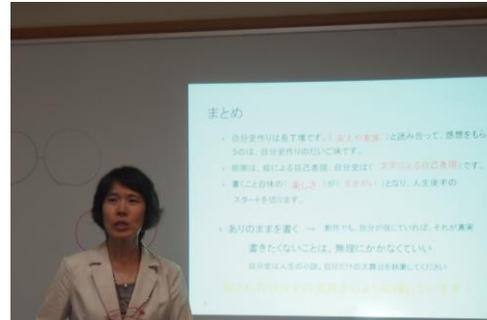
自分史を書こう

日時 2017年7月10日(月)
15:00~17:00
会場 国立オリンピック記念青少年総合センター会議室
参加者 13名

今回のサロンは、東京創作出版代表永島静香さんをお招きして、「自分史」に対する考え方、まとめ方、出版方法などについてお話いただいた。

永島さんは、編集者や新聞記者を経て、自費出版を専門とする東京創作出版を設立された。

現在、地域に根ざしたテーマをもとに本づくりをおこなうかたわら、地元松戸や市川において、自分史づくりを普及させるボランティア活動を



行っていらっしゃる。

さて、自分史というと、サラリーマンをリタイアした者としては、日本経済新聞の「私の履歴書」が、まず念頭に浮かぶ。

これは、一カ月連載なので、400字詰め原稿用紙1日3枚として、計100枚ぐらいなので、その気になればなんとか書けそうである。

立花隆「自分史の書き方」によれば、「これからの人生（セカンドステージ）のデザインになにより必要なのは、自分のこれまでの人生（ファーストステージ）をしっかりと見つめ直すことである。そのために最良の方法は、自分史を書くことである」とのことである。

健康寿命をすこしでも延ばすために、生きがいを持ってセカンドステージにのぞむ必要性がいわれているが、自分史はその第一歩と思われる。

しかし、講師によれば、自分史に寄せる思いは人それぞれにまったく違うので、書き方は自由でよいそうだ。

人生全部でもいい、ある限られた期間だけでもいい。楽しかったこと、感動したこと、やり残した目標、新たな目標、思うままに綴ってみては、とのこと。

会員で、自分史に取り組みたい向きには、永島さんにご連絡ください。



永島講師
(前列中央)

□ トピックス □

太田秀樹中大研究開発機構教授も

逆流坂川

現地を歩く

さる3月29日開催の第24回サロンは、「坂川逆流の謎に迫る現地視察会」として、松戸市の江戸川と坂川流域を歩いた。

この話をシビルサポーターの伊藤雅夫さんから聞かれた太田秀樹中央大学研究開発機構教授から、「自分もぜひ見たい」とのご要望があり、5月29日午後、伊藤さん、辻田代表、高橋事務局長が同行して現地見学をおこなった。

教授は、地盤工学会長をされ河川にも造詣の深い土木の泰斗なので、逆流坂川レポートを書いた高橋事務局長（土木についてまったくの素人）は、「いったい何にご興味をもたれたのだろうか、じゅうぶんご説明ができるだろうか？」と不安げだった。

お会いしてみるとじつにきさくな方で、午前中は柴又の帝釈天や矢切の渡しに行かれたにもかかわらず、約6キロの全行程を会話を楽しみながら踏破された。

夕方から駅前で一献、談論風発おもしろい話題が次つぎに披露されて、あっという間に数時間がすぎてしまった。結局、何に興味をもたれたか？について、お伺いするのを忘れてしまったほどである。

教授は、次回サロン（10月16日）での講演を引き受けてくださった。みなさん、ぜひご聴講ください。



明治150年企画事業の紹介

当NPOが加盟しているシビルNPO連携プラットフォーム（CNCP）では、今年度より辻田代表が担当している事業化推進部門に、CNCPの事業化専従組織としてCNCPシンクタンクチーム（CTT）が立ち上げられて活動を開始しております。CTTでは、様々な事業が動きだしていますが、そのなかで「明治150年企画事業」を紹介します。

平成30年（2018年）が明治改元の布告から満150年目にあたるので、政府では昨年末に、各府省庁連絡会議において、「明治150年」関連施策の推進について」を取りまとめ、活動を開始することになりました。

施策の方向性として

○明治以降の歩みを次世代に遺すこと

○明治の精神に学び、さらに飛躍する国をめざすこと

となっており、各機関においては、広報・情報の発信や民間を含めた多様な取り組みが推進されるよう機運を高めていくこととしています。

土木の世界では、土木という言葉の使用や学問としての土木工学がスタートしたのは、まさに明治期からであり、土木という言葉が案外知られていないのも歴史の浅さにあるのかもしれませんが。

そのため、土木の歴史と文化を私たち自身が再認識するとともに、まだ地域に埋もれている多くの事蹟を発掘して整理していくことが出来れば、土木・どぼく・シビルエンジニアリングへの国民の理解促進にも役立っていくのではと思います。

このような取り組みは、各地で組織的に行われるでしょうが、CNCP では定常的な事業に加え、新たに「CNCP 活動を面白くしていく取り組み」として、会員・関係者が身近な土木の歴史と文化を発掘し、それを集積して情報交流するという“お楽しみプロジェクト”をめざして取り組みを始めます。

集められた情報は、CNCP 通信やサポーターミーティングで順次発表していくこととし、最終的には土木学会のオンライン土木博物館“ドボ博”とも連携できればと考えます。

資料等の発掘は、関係者ご自身の生活領域の範囲で目についたもの、以前から気になっていたものなどを広く知らせてもらう形とし、掲載等は担当チーム（未定）で整理の上実施することを考えます。

事例は

- 埋もれている（あまり知られていない）どぼく施設・構造物・文書など
 - 町村などにある刊行物
 - 見つけた古い写真や現在の史跡を撮った写真
 - 調査研究資料
 - ご自身でまとめられた調査研究や寄稿
- その他いろいろです。

どぼくの文化や歴史は、人気番組の「プラタモリ」でも多く取り上げられていますし、ダムマニアとダムカード、社会科見学ツアーなど国民の多くが関心を持っていることがわかります。そのボリュームは膨大であり、無限です。

今回、CNCP ではワーキングメンバーを募り、CNCP として出来る範囲での”お楽しみプロジェクト”を企画します。ご興味のおありの方は辻田までお問い合わせ下さい。

CSN のうごき

行事・イベント	実施日	参加者
事務局定例会議	5/1、6/5、7/3	辻田、宇佐、高橋
シビルNPO連携プラットフォーム運営会議	5/9、6/13、7/11	辻田
第25回CSNサロン	7/10	13名
CSN 役員懇談会	7/3	辻田、宇佐、高橋、舌間、鈴木、和久、小川
活動報告季刊誌第18号発行	7/31	

□ コラム □

エモい

会員 山田 泰行

今年の春から日経MJ新聞を購読しています。

日経MJ新聞は、ヒットしている商品・サービスについての記事が主体です。消費を通して世の中の動向を知ることができ、また月曜、水曜、金曜に発行される頻度も、私にはちょうど良くて気に入っています。

その日経MJ新聞から興味深かった記事をご紹介します。

5月26日発行版に“若い女性が抱える「モヤ

モヤ」した感情を「エモカワイイ」と称して発信するベンチャー企業”という記事がありました。

なんのことだかさっぱり分かりませんよね！！

記事によると、例えば“見た目がかわいらしいビール好きの女性が、自宅で一人酒に興じる姿“は、見た目からは意外な側面として、同世代が共感するのだそうです。

そうした、若い女性の飾らない日常の様子の中から、共感を呼びそうなものを独自の観点でネット発信し、ネットを見る人が多くなれば、企業が

らの広告依頼に結びつけるしくみです（私の理解が間違っていたら申し訳ありません！）。

土木業界に身を置く私は、その様なコンテンツに付加価値が付くのだなとしみじみ感じます。

それはさておき、私が気になったのはこの「エモカワイイ」の記事で解説されていた「エモい」という言葉です。

「エモい」は国語辞典の三省堂が選んだ「今年の新語2016」で第2位だったそうです。若い人たちが造語でコミュニケーションする際の、いわゆる「ギャル語」「若者語」の範疇です。

45歳の私は「エモい」を知りませんでした。

「エモい」の意味は「人の心に強く訴えかける働きを備えている様子」で、「感情」を意味する英語の「emotion」が由来とのことでした。

まだ???という印象でしたが、古代においての「あはれ」と同じで、古代の「いとあはれ」が現代では「超エモい」になるそうです。これでやっと理解しました。

私は「ギャル語」「若者語」に抵抗があり、電車の中で若い人たちが話しているのを耳にすると、ついつい「気持ち悪い日本語を使うな！」とか思ってしまいますが、かくいう私も、記事の中で「エモい」と似た言葉として解説されていた「ヤバイ」を使います。

「ヤバイ」の本来の意味は「(状況が)まずい」に近いはずで、「ヤバイ」を「エモい」に似た意味として使うと、意味不明で不快に感じる方がいらっしゃるのだと反省した次第です。

一方、「エモい」のような新語も、時代の変化や世の中の動向の一部と考えると、自分が受け手の立場では忌み嫌わず順応する必要がありますが、先日会った中学二年生の姪に「エモい」を使っているか聞いてみたら、意味を知らないとのことでした。

ちなみに、前述した「今年の新語2016」の第1位は「ほぼほぼ」でした。皆様は「ほぼほぼ」の意味をご存知でしょうか(笑)?

編集後記

- 会員の多くは、自分史を書いてもおかしくない年齢に達していると思う。
今回のサロンの永島講師が主宰する「自分史セミナー」の受講生たちが書いた作品を、いくつか読ませていただいた。
自慢話ばかりかと思いきや、「こんな生き方もあったのか」と内容に引きずり込まれ、読みふけてしまうものが多く、自分史を改めて見直した次第である。
- 牛蒡のきんぴらを食べながら牛蒡談義をした。牛蒡の花は、アザミそっくりだそうだが、誰も見たことがない。牛蒡は、花を咲かせると実がダメになるので、開花前に全部摘んでしまうとのこと。まぼろしの花なのだ。その花の写真を撮りたくて、千葉や茨城の栽培農家を探したが花はなかった。見かねた友人が、自宅の菜園で一株だけ作ってくれた。種をまいて開花まで1年半かかるそうだが、それが、この7月初旬についに咲いた。まぼろしの花をご覧ください。



(事務局：高橋 肇)